

おかざきしゅう たす

## 岡崎衆を助けた

おだい かた

於大の方

(緒川)

みずのしよんだい ただまき むすめ おだい かた おかざきじょう  
水野氏四代め忠政の娘、於大の方は、岡崎城

しゅまつだいらひろただ いっしたけちよ のち いえやす  
主松平広忠にとつき、一子竹千代(後の家康)

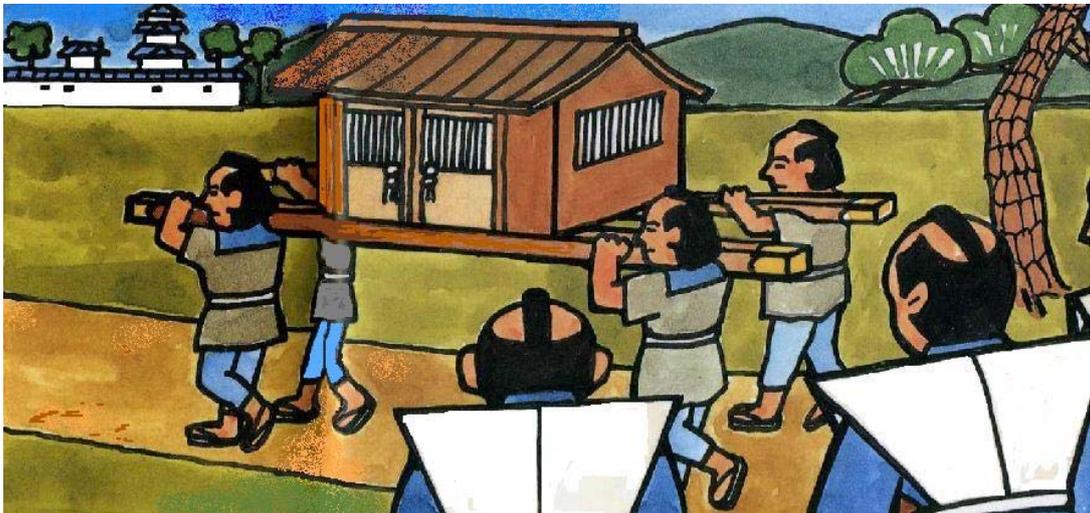
う たけちよ さい とき ひろただ とつぜん  
を生みましたが、竹千代三歳の時、広忠は突然

おだい りえん みずのけ かえ  
於大を離縁し、水野家へ帰すことになりました。

おだい ちちみずのただまき びょうし あと つつ おだい  
於大の父水野忠政が病死し、後を継いだ於大の

あに のぶもと いまがわし たいりつ おだのぶなが て  
兄の信元が、今川氏と対立する織田信長と手を

むす いまがわは まつだいらし  
結んだためです。今川派の松平氏としては、こ



いまがわし  
うして今川氏

ちゅうせいしん  
への忠誠心を

しめ  
示すよりしか

たがなかつた

のです。

おかざき  
十七人の岡崎

さむらい さんにん  
の侍と三人

こしもと まも  
の腰元に守ら

おだい こし  
れた於大の輿

おかざき しろう  
は、岡崎の城を

で のぶもと  
出で、信元のい

かりやじょう すす る刈谷城へと進みました。嫁入りの時も、人目をしのんでの輿入れでしたが、このときは、もつとさびしいものでした。

一行が、岡崎と刈谷の境まで来たとき、於大の方は、岡崎衆に輿を下ろすようにたのみました。

「皆の者、大変ご苦労であった。ここからは、刈谷の領地です。輿を置いて帰っておくれ。」  
於大の方の、この突然の言葉に、お伴の侍たち

ちは驚きながら、

「お殿様は、刈谷までお伴いたせと申されましたので……。」

と帰ろうといたしません。

「兄の信元殿は、大変気の短いお方です。わたくしが帰されることに腹を立てておいでし

よう。お前たちがお城まで行けば、きつと殺されます。そこで刃向かったとしても、多勢に

無勢、無益な血を流すだけです。」

と、於大の方は、なんとか岡崎の侍衆を帰そうとなさいますが、侍たちは、なかなか帰ろうといたしません。

「ご内室さまのありがたいお心は、わたくしども身にしみて感じております。しかし、わた

くしどもは、岡崎の城を出るときから覚悟して参りました。ここでわたくしどもが、輿を置いて帰ったとあらば、殿様のご命令にそむき、末代までの恥となります。たとえ刈谷の城で殺されようとも、ご内室さまを無事にお送りするまで帰らぬ覚悟でございます。」

「ご内室さま、どうかこのままお城までお送りさせていただきますとう存じます。」

侍たちが、口々に刈谷の城まで送りたいと言うのをさえぎって、於大の方も必死に説得なさいます。

「お前たちの気持ちは、よおくわかりました。しかし、わたくしが、殿様と別れても、竹千代は岡崎におります。お前たちには、竹千代成長の折に、ぜひ忠義を尽くしてもらいたいです。いまは、敵味方に別れていても、竹千代と信元殿は、伯父・甥の間柄ですから、いつか和睦を結ぶときが参りましょう。今お前たちが、刈谷の城で命を落とすようなことになれば、竹千代は、信元殿をうらんで和睦の妨げにもなりましょう。そうなれば、わたくしは、再び竹千代と会うことはむつかしくなります。どうか、ここは、わたくしのために

も、竹千代のためにも、いえ、お家のためにも、

も、このまま帰っておくれ。間もなく水野か

ら迎えも参ります。わたくしのことは、少し

も心配いりません。」

於大の方の熱心な言葉をついに受け入れた岡

崎衆は、近くで野良仕事をしていた百姓を呼

んで輿をかつがせますと、後をふりかえりなが

ら岡崎への道を引き返し、林の中へかくれまし

た。そこから、なおも於大の方の輿がだんだん小

さくなつていくのを見送っていますと、やがて、

刈谷城の方から、数十騎の騎馬の集団が現れ、

於大の輿にかけ寄るのが見られました。

一方、岡崎衆を帰してほつとされた於大の方

が、百姓たちのかつぐ輿に揺られてしばらく

したところで、かすかに騎馬の音が聞こえはじ

めました。次第に音は大きくなり、やがて輿の

そばでとまりました。刈谷城から迎えの侍た

ちがやってきたのです。

於大の方が、輿の窓を開いて顔を出しますと、

侍たちは、馬を下りてひざまずき、於大の方

に申し上げます。

「われら刈谷城よりお迎えに参りました。殿よ



り、岡崎の侍どもを討ち取れとのご命令で  
す。お送りして参った侍どもは、いかな

されましたか。」

と、羽織をぬいで、戦いの用意を始めようと

します。そこで、於大の方は、にっこりと笑っ

て言いました。

「お役目、ごくろうです。送って参った岡崎

衆は、もうとつくに帰しました。今ごろは、

岡崎の城に着いているころでしょうに。」

岡崎では、このときの於大の方のはからい

が大いに評判となり、いつまでも語り伝えら

れたということです。